

- 「知覚のヴェール」 Veil of perception
- 「識感のない視覚」 Blindsight
- 「表象観念の理論」 Theory of representative ideas
- 「ゲティアの実例」 Gettier examples
- 「推論連結主義者的な意味論」 Inferentialist semantics
- 「表出主義」 Expressivism
- 「実在論、反実在論」 Realism and anti-realism
- 「観察不能存在者」 Unobservable entities
- 「錯誤理論」 Error-theory

1、新語集のリストアップ

私は **Inferentialism** という言葉の意味を知りたいと思った。**Inference** は「推理」という意味だから、「推理主義」とか「推理連結主義」とか訳していいように思われる。

Robert B.Brandon: Articulating Reasons ——An Introduction to Inferentialism, Harvard University Press 2000

この書物が示すように、英米哲学とドイツ観念論との出会いというのが、今、哲学の世界で起こっているもっとも興味深い出来事であると思われる。その出会いの真ん中に、**Inferentialism** という言葉が居座っている。

David J. Chalmers: Constructing the World, Oxford 2012

この本にも **Inferentialism** という言葉が登場するが、「チャーマーズ、ネーゲルなどの人々が説明するハードプロブレムの根っこのところには、デカルトの主観概念、そしてその主観主義と還元主義的科学の客観的方法の矛盾がある」(G.ザルカダキス『A I は心を持てるのか』長尾高弘訳、日経BP社184頁) という言葉をよむと、英米哲学とドイツ観念論との出会いがA I 論のなかにも組み込まれているように思われる。

Jaroslav Peregrin: Inferentialism and Normativity という論文がある。**M.Beaney ed.The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy,2013** に採録されている。

Huw Price: Expressivism, Pragmatism and Representationalism, Cambridge 2013

この本にも **Inferentialism** という言葉が登場するが、いまのところこの事典にも、項目化されてはいないらしい。もし事典に乗っていたとしても、その言葉を知るためには、**Expressivism** (表出主義) とか、**Representationalism** (表象主義) とか、**Reliabilism** (信頼性主義) の意味を調べなくてはならないとすると、限りなく調査範囲が拡大して、拡大を防ぐことができない。最近の哲学事典等から新語をあつめて、調査範囲の拡大をまず防いでおきたい。

サイモン・ブラックバーン著「オックスフォード哲学事典」三版 Simon Blackburn: Oxford Dictionary of Philosophy, 2016 (以下「ブラックバーン三版」と略称)は、第三版の配慮として、文書全般の電子化に対応する、経済学など周辺領域から語彙を採用する、極端に専門的な用語は排除するという方針を掲げている。この方針におおむね異議はないが、たとえば経済学の領域だと専門の経済学事典を使った方が便利である。私の目下の関心事は、Inferentialism という言葉にあるが、英米圏認識論・形而上学で極端な新語発生現象が起っているため、その新語をカバーする専門家向けの事典が必要であると思う。

「哲学新語集 2016」を編集すると仮定する。たとえば Stathis Psillos: Philosophy of Science A-Z (2007 Edinburgh University Press) は、「プシロス科学哲学小事典」と略称するが、とても分かりやすく、20世紀90年代から21世紀初頭の議論を集めている。A Dictionary of Postmodernism (Niall Lucy の遺稿を John Hartley 編で加筆、Willy Blackwell 2016) のような事典も出ている。本文が約200頁の小著で、全40項目の14を人名に当てている。これと対比すると、The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy, ed. by Michael Beaney 2013 は1000頁を超える。The Blackwell Dictionary of Western Philosophy, ed. by N. Bunnin and J. Yu, 2004 の本文が740頁ある。The Routledge Companion to Twentieth Century Philosophy, ed. by D. Moran, 2008 の本文が約900頁ある。Columbia Companion to Twentieth-Century Philosophies, ed. C. Boundas, 2007 の本文が約700頁ある。The Cambridge Dictionary of Philosophy, 2nd Edition, 1999 の本文が約1000頁ある。

事典ではないが大著の付録に Glossary として用語辞典をそなえているものがある。たとえば Introduction to Philosophy, J. Perry, M. Bratman, J. M. Fischer (ed.) 7th. Edition, 2016 (「オックスフォード哲学入門七版」と略称)は、分かりやすく、問題の掘り下げ方が鋭い。ただし、新語にたいして鈍感である。

定評のある大型の既刊書としては、ヨアヒム・リッター編の哲学歴史事典 (Historisches Woerterbuch der Philosophie, Schwabe AG, 2007) は、全13巻、索引だけで約900頁ある。英語圏の単語はほとんど採録されていない。全テキストの CDROM が付録になっている。マクミラン社の哲学百科事典 (Encyclopedia of Philosophy) 2版 2006 は、全10巻、索引だけで約500頁ある。Expressivism, Reliabilism, Representationalism が採録されているが、現代的な議論の核心から外れている場合がある。

この「哲学新語集 2016」には、1990年代以後に認識論、科学哲学、形而上学など哲学のハードな領域で浮かび上がってきた単語を採録したい。固有名詞、周辺領域、応用倫理学、非西洋哲学の用語は排除する。

日本の読者のためには、岩波書店「哲学・思想事典」(1998)、弘文堂「現代倫理学事典」(2006)、研究社「イギリス哲学・思想事典」(2007)、共立出版「カラー図解哲学事典」(2010)、有斐閣「現代哲学キーワード」(2016) に採録されていないもので、重要な単語を拾うという観点も必要だろう。

A Dictionary of Philosophy, ed. by A.R. Lacey, Routledge 1976, 1986, 1996 の最後の第三版（以下「レイセー三版」と略称）には新規に付け足した項目が記載されている。その中の人名（Armstrong, Chisholm, Davidson, Dummett, Kripke, Lewis, Putnam）を除く。次に古代近代以来の基礎概念（Abstract, Consciousness, Content, Disposition, Emergence, Haecceity, Individualism, Numbers, Primitive, Third man argument, Virtue.）も除く。説明が五行以下の項目（Idiolect, Scientism.）を除く。岩波の哲学思想事典の欧文索引に記載されている項目（Algorithm, Connectionism, Folk psychology, Foundationalism, Imagery, Original position, Perspectivism, Possible worlds, Reflective equilibrium, Trope, Turing machine, Turing test, Vagueness.）を除く。弘文堂現代倫理学事典の外国語事項索引に記載されている項目（Closure, Cognitivism, Particularism, Supervenience.）を除く。

この段階で「レイセー三版」の新項目には次のものが残っている。

Actualism, Analysis(paradox of), Chinese room argument, Combinatorialism, Dialetheism, Doxastic, Egocentric predicament, Frege argument, Generality constraint, Innate, Internalism and externalism, Intrinsic and extrinsic, Language of thought, Mach's Principle, Mereology, Methodological solipsism, Paraconsistency, Perdurant, Process philosophy, Psycholinguistics, Psychosemantics, Ramsey sentence, Superassertible, Supervenience, Synechism, Tacit and implicit knowledge, Thick and thin concepts, Tracking, Veil of perception,

これに「ブラックバーン三版」から次の単語を候補として選んでみた。

agglomeration, blindsight, brain in a vat, compositionality, conceptualism, Darwin machine, deflation theory of truth, disnotation theory of truth,

これらの単語は、今回ではその一部の事典項目を翻訳したにとどまるが、いずれ、すべてを翻訳しようと考えている。

2、表象主義の周辺

「知覚のヴェール」 Veil of perception（レイセー三版）

「Bennett's name for a doctrine, or perhaps just assumption, which he attributes to Locke in particular. ベネットが特にロックに帰した教義、もしくは想定を指す名称。This is that we are in effect separated by a veil from the world outside our minds, われわれは事実上われわれの心の外部にある世界からヴェールで隔てられているという教義である。so that we can only perceive things outside us by having IDEAS which copy and resemble those things. われわれは外部の事物を映す、もしくはそれに類似する観念を持つことによつてのみ外部の事物を知覚することができる。」

「識感のない視覚」 blindsight,（ブラックバーン三版）

「The phenomenon in which a patient has no conscious visual experience in some direction, yet functions much better than a blind person could in various tasks involving the spatial location of objects in that region. 患者が視覚経験の意識をもたない一定の方向で、さまざまな作業で、その領域の物体の特定の位置などを含めて、盲目の人よりもすぐれた機能が働く現象。Philosophically, the syndrome illustrates the complexities of mental processes that may occur somewhere below the conscious threshold. 哲学的には、この徴候は、意識の閾以下で生ずる心的過程の複合性を明示している」。

この現象については加藤尚武「かたちの哲学」（中央公論社 1991、岩波現代文庫 2008）で説明しておいた。脳の虚血などの理由で視野に欠損がある患者に、その欠損部分での発光を「見せる」と言い当てることができるという現象である。参照すべき事例に「可聴域外聴覚」という例もある。太鼓の音を聴く人は、太鼓から発するの可聴域外の粗密波を感じている。「すべての根源的な所与を作り出す感覚には、その感覚の自己意識、識感が伴われる。それゆえその感覚を記述することができる」という前提を多くの現象学者は信じているが、それに対する反証例が、blindsight などの現象である。Blindsight は、The Blackwell Dictionary of Western Philosophy, ed. by N. Bunnin and J. Yu, 2004 および、The Cambridge Dictionary of Philosophy, 2nd Edition, 1999 にも記載されている。

「表象観念の理論」 theory of representative ideas (オックスフォード哲学入門七版)

「表象観念の理論は、外的事物の知識は知る人の心の中の観念 ideas によって媒介されていると主張している。知る人は、外的事物を彼らがそれらに対して持つ二肢的な関係のおかげで in virtue of a twofold relation 表象する。この観念は外的な事物によって引き起こされて caused いる。外的な事物を特定の性質をもつものとして描写 depict している。」目の前の椅子という例が出てくる。「この理論は、まちがい errors もあるという配慮、知覚の相対性、錯覚論法を受け入れている。 This theory allows an account of error and a treatment of the argument from perceptual relativity and the argument from illusion. The argument from perceptual relativity shows that 知覚のこの相対性論法は、which thing an idea represents どの物が観念を再現しているかを、and how it depicts that object to be do not depend just on the features of the idea, but also on auxiliary beliefs. また、いかにして観念が対象がまさに観念の相貌に依存しているのではなく、補助的な信念に依存しているかを描き出しているかを示している。 The same visual image might represent an object as elliptical or circular, depending on whether it was taken to be held at a right angle or an acute angle to the line of vision. ある物体が視線の正しい角度でとらえられるか、もしくはきつい角度でとらえられるかに応じて、楕円を表したり、円を表したりするような視覚像もある。 Normal errors and illusions occur 通常の間違いや錯覚は when the idea caused by a thing does not accurately depict it, either

because the auxiliary beliefs are wrong, 物によって引き起こされた観念が正確にそのものを描写しない場合に起こる。もしくは補助的な信念が間違っているという理由で起こる。or something unusual in the perceiving conditions or the perceiver's state leads to a wrong idea being produced. さもなければ知覚条件になにか異常なことがある。もしくは、知覚者の状態が、産出される間違った観念に通じているかである。The more radical types of error involved in certain kinds of delusions, such as hallucinations, involve having an idea that is not caused by an external thing at all,間違いのもっと過激な場合は、幻覚だとか何かの妄想に巻き込まれている。すなわち外部の物によっては惹き起こされていない観念を持つことを巻き添えにしている。But by some disorder in the perceiver.知覚者における何らかの故障による。」

この文章の中の「補助的な信念」(auxiliary beliefs)という言葉は、私には難解である。「幽霊か、枯れ尾花かと疑ったが、風に連動して揺れるので、幽霊ではないと判断」という場合、「風に連動して揺れるから幽霊のはずはない」という判断を「補助的な信念」と解釈すれば、話は通る。

この項目の最後に「表象観念の理論」は、デカルト、ロック、バークリ、ヒュームに見られ、他の哲学者はそれを批判していると述べられている。「水の中の棒は曲がって見えるから知覚はあてにならない」と最初に述べたのは、プラトンである。「錯覚が存在するので知覚はあてにならない」という錯覚論法に対して、「感覚は偽らない。誤りはより高次の次元から発する」という感覚根源説が対立していた。

私は「主観と客観のあいだにどのようなつながりが生まれるか」という問題の形式を「橋架け問題」と呼ぶことにしている。「兩岸」に相当するような二肢的な関係が、根源的であると多くの哲学者が信じているが、その二極性の成立根拠が問題だというのが、シェリング、ヘーゲルの「同一哲学」以後の思想的営為だった。

英米の思想圏では、ローティ『哲学と自然の鏡』(1979年)が、西洋哲学史全体を「橋架け問題」として描き出すという間違いが大きな影響を作り出して、現代のヘーゲル復権・プラグマティズムの動向を生み出しているが、問題をもっと掘り下げれば、主観・客観の二極性の成立根拠を問わなくてはならない。

3、ゲティア問題と信頼性

「ゲティア問題」は、岩波の「哲学思想事典」に採録されているが、研究社「イギリス哲学・思想事典」が「知識と信念」という中項目で扱っているので、信頼性とのつながりが分かりやすい。

「1963年にアメリカの哲学者 EL.ゲティアは2ページ半の論文をイギリスの哲学雑誌『アナリシス』に投稿した。ゲティアは、人があることについて真なる信念を持っており、しかも、それには正当な理由があるのに、その人はそれを知っているとは言えない事例

を挙げた。これはゲティア反例と呼ばれてい、一つの例はこうである。サチコとイチローがある採用試験を受けたとする。サチコは次の連言命題について強い証拠を持っていると仮定する。

(1)イチローは採用されるであろうし、かつイチローはポケットに10円持っている。たとえば、サチコはその会社の社長からイチローが採用されるであろうと聞いていたし、少し前にイチローのポケットの中を見たのであればよい。ところで、(1)は次の命題を論理的に含意する。

(2)採用されるであろう者はポケットに10円持っている。

サチコはこの論理的含意を理解しているものとし、(1)に基づいて(2)を受け入れるとする。彼女が(1)を信じるのは正当であるから、彼女が(2)を信じるのは正当である。しかし、採用されるのはサチコであり、サチコはポケットに10円を持っているが、サチコ自身はこれらのことを知らないとする。すると、(1)は偽であるが、(2)はたまたま真である。それゆえ、(2)は真であり、サチコは(2)が真であると信じており、彼女が(2)を信じるのは正当であるが、彼女が(2)を知っているとは言えない。

要するに、真なる信念を持っており、その信念は普通はもっともだと思われる仕方で獲得されているのに、知識とは言えないような場合がある。それゆえ、知識の標準的な定義には何かが欠けているように思われる。そして、多くの哲学者がその欠けた条件を見出そうと努力してきた。」(中才敏郎)

私は、自分のポケットの中の一万円札が、自分のものであり、自分が正当に所有するものであると信じているという例に似ていると思った。占有と所有は通常は重なっているが、そうでない場合もある。もしも一万円が電子マネーで、そのカードを読み解くと、一万円の所有の変遷が追跡可能であるとするれば、自分のポケットのなかの現金が正当に自分の所有であることを明らかにすることができる。

この問題についてブラックバーンが、多少ふざけた記述をしているので紹介しよう。

「ゲティアの実例」 Gettier examples (ブラックバーン三版)

For example, I see what I reasonably and justifiably take to be an event of your receiving a bottle of whisky and on this basis I believe you drink whisky. 例えば、君がウイスキーのボトルを入手したことを、当然で、正当化可能な形で事実と見なしていいと知っている。この根拠によって、私は君がウイスキーを飲むと信じる。The truth is that you do drink whisky, but on this occasion you were in fact taking delivery of a medical specimen. 真実は、君はウイスキーを飲むには飲むが、実際には君は医療用の試料受け取る立場にあった。In such a case my belief is true and justified, but I do not thereby know that you drink whisky, since this truth is only accidental relative to my evidence. このような場合には、私の信念は真実であり、正当であるが、しかし、君がウイスキーを飲むこ

とを知っているわけではない。この真実は私の証拠に対して偶然的相関でしかないからである。」

「信頼性」Reliabilism, Theory of reliability (弘文堂「現代倫理学事典」の「自然主義」の項目)

「ゲティア Edmund L. Gettier 以降の外在主義的認識論、とりわけ A. ゴールドマン Alvin Goldman に代表される信頼性主義(reliabilism)の流れを挙げるができる。信頼性主義とは、知識の条件として「真なる信念」に加えて、その信念が信頼の置けるプロセスによって形成されたことを要求する。ここで言う「信頼の置けるプロセス」とは、信念と外界の様子との間に法則的なつながりがあるようなプロセスのことである。ところが、信念と外界の間のどのようなつながりが法則的であり適切であるのかの探求は、認知主体の内的メカニズムと環境がどのようなものであるかについての経験科学的な探求なしには行うことができない。こうして、信頼性主義は認識論的自然主義のメルクマールの 1 つと位置づけられることになる。」(戸田山和久)

正直に告白するが、私にはゲティア問題が「ピンと来ない」。英語圏で大騒ぎをするのも不可解である。『テアイトス』で哲学の手ほどきを受けたかどうか、決定的なのではないだろうか。「知識」という言葉に「真である」という含意があるという実感が私にはない。「月にウサギがいるって知っていますか」とか、「私はハムレットが自殺しなかったことを知っている」という文章で「知る」という言葉が、通常の意味を逸脱しているという実感は私にはない。おそらくこの実感は世界共通だと思う。

ゲティア問題と似ている例として、私は次の問題を心に浮かべた。私が手に持っている(占有している)現金が、私の正当な所有であることを明らかにするには、その現金(電子マネー)に全ての所有権の移転経過が書きこまれていれば問題が起こらない。私の知識にも、そのような経過保存措置が書きこまれていて、私の信念となった経過が追跡可能 traceable であるなら、問題は起こらない。

私のポケットにある一万円札が、「正当に私のものであるといえる条件」、「私が自由に処分していい条件」は何か、枚挙せよ。この課題に、答えようとする、「私のポケットにある一万円札」の含意のすべてを明らかにしなくてはならない。それでは社会生活がなりたない。特別の理由がない限り、「私のポケットにある一万円札は正当に私のものでありかつ、私が自由に処分していい」と見なすことで、社会生活の常識が成り立っている。常識とは、立証責任の解除である。

「重力波が測定されたことを知っていますか」と聞かれて、「知っています。ただし、テレビのニュースで見ただけですが」という人は、「知っている」ということが、伝聞の共有にすぎないことを知っている。「マイケルソン・モーリの実験装置とほぼ同じ装置が使われたのはなぜですか」とか、「光の速度が一定であるという前提は当然のものとして使われて

いるわけですね」などという追加の質問に答えられるかどうかで、「知っている」の含意は違ってくる。ゲティア問題は、「知っていることの含意のすべてを明らかにせよ」という問題の扉を開いたのだと思う。

4、Inferentialism

D.Moran(ed.)The Routledge Companion to Twentieth Century Philosophy, 2008 の glossary に「推論連結主義者の意味論」Inferentialist semantics という項目がある。

「推論連結主義の意味論」とは、an approach that claims that the meaning of terms, at least those of interest to philosophy, can be satisfactorily explained by their inferential links to each other; 術語の意味、すくなくとも哲学的に興味のある述語の意味は、それら相互の間の推論的な連結によって十分に説明されると主張するアプローチである。

or, a theory that claims that to know what a term means is to know what inferences one can make with it, 換言すると、ある述語が何を意味するかを知ることは、それによって人がどのような推論連結を作り出すことができるかを知ることである。

to what other positions in the conceptual firmament one is entitled to move by virtue of undertaking the commitments that term brings with it. [すなわち] 概念の領界で人がどのような他の位置にまで、その術語が身に着けている拘束・約束を引き受けることによって、動かすことが許されるかを知ることである。」

譬え話であるが、ある人を知ることは、その人の交際範囲を知ることであるという考え方があり。ゲーテの格言にもあるが、マルクスのフォイエルバッハ・テーゼにある「人間とは社会的諸関係のアンサンブルである」という言葉を、ゲーテ並みに理解してもいい。

この話を、「アイデアの内容はそのメテクシス(分有)によって知られる」と言い換えると、アリストテレス主義との接点が見えてくるだろう。

もっと端的に「概念は推論である。普遍、特殊、個別の相互媒介の全体が概念に内属する」と言えば、推論連結主義がヘーゲル主義にほかならないことが分かるだろう。

さて、上に掲げた D.Moran(ed.)The Routledge Companion to Twentieth Century Philosophy, 2008 の glossary に対応する本文がある。その本文、すなわち Terry Pinkard: Hegelianism in the Twentieth Century (p.118-147) は、20世紀に英米の思想圏で完全に「死んだもの」として扱われてきたヘーゲルが、「生きたもの」として復権を遂げる過程をラッセル、ムーア、クローチェ、ルカーチ、コジェブ、イポリット、ガダマー、ヘンリッヒと丹念にたどって見せる。とくにストローソンのカント解釈が思想的な転換点となったという指摘は、優れている。

Terry Pinkard は、Charles Taylor (1931-) の登場を次のように描いている。

「Although Findlay's work was a step in the reawakening of interest in Hegel, it at first did little to interest analytical philosophers in exploring Hegel further. フィンドレ

イの著作はヘーゲルへの関心を再び目覚めさせる一ステップであったが、最初の内は、分析哲学者たちのヘーゲル探求への関心をあまり高めることはなかった。The Hegel revival came into fuller swing when in 1975, the Oxford philosopher, Charles Taylor (1931–), published his ground-breaking Hegel, ヘーゲル復活が完全な振幅を持つに至ったのは、オクスフォードの哲学者、チャールズ・テイラーがその画期的なヘーゲル書を公刊したときであった。which, like Findlay's book, attempted to survey the whole of Hegel's system to see what was living and what was dead in it. この著作は、フィンドレイのと同様に、ヘーゲル体系の全体を調べて、その中の生きているものと死んでいるものを見いだそうとした。Like Findlay, Taylor saw Hegel as a quintessential "modernist," but unlike Findlay, Taylor argued that we should understand Hegel as responding to a deeper philosophical problem in western modernity. フィンドレイと同様にテイラーもヘーゲルをれっきとした近代人と見なした。しかし、フィンドレイと違ってテイラーは、西洋近代の深い哲学的な問題への応答としてヘーゲルを理解しなくてはならないと主張した。Indeed, for Taylor, it is because Hegel turns out to be so at odds with the dominant trends of contemporary philosophy (rather than as being continuous with, say, Wittgenstein or some other contemporary figure) that he is all the more interesting. 実際、テイラーにとって、ヘーゲルがますます興味深くなる理由は、現代哲学の主力をなす傾向とヘーゲルとが（ヴィトゲンシュタインとか、その他の現代人とつながっているというよりは）せめぎ合いとなっているからなのであった。The deeper problem to which Hegel was responding, so Taylor claimed, was the difficulty of reconciling two different demands that modern life made on itself: ヘーゲルが対決しているより深い問題とは、テイラーの主張では、近代生活が自分につくりだした二つの異なる要求の和解に困難があるということである。On the one hand, after the scientific revolution, nature was "disenchanted," devoid of meaning; 一方では、科学革命以降、自然は魔法の解けた状態、意味のない状態になってしまった。on the other hand, the new conception of the human agent (the modern "subject") that had emerged out of the scientific revolution and the political and cultural upheavals of modernity claimed a certain rational and even radical autonomy for itself. 他方では、人間主体と言う新しい概念（近代的主観）があつて、それは近代性の科学革命と政治・文化的激動のなかから発生したのであった。この人間主体が一定の合理的なおかつ根源的な自立を自分のために主張した。The problem was how to unite these two — self-determining subjectivity and objective, disenchanted nature — into one comprehensive view, 問題はいかにしてこの二つのもの——自己決定する主体性と客観的な、魔法を解かれた自然を一つの包括的な視点へと統合するかという問題であった。and, this formed, in a sense, the philosophical problem for modernity, which although deeply philosophical, was nonetheless not just "academic." この問題が、ある意味では、近代性への哲学的問題を形作つた。それは深く哲学的ではあつたが、それにもかかわらず、

まったく「アカデミック」でもなかった。The response to this was at first that of "expressivism" (a term of art Taylor introduced to capture the sense of what was at work in the late eighteenth and early nineteenth centuries). この問題への応答が、まず最初には表出主義"expressivism"であった。18世紀末もしくは19世紀初期に有効であったものの意味を捉えるためにテイラーが導入した芸術の用語である。Rather than understanding meaning as the link between two types of objective things, 意味を二つのタイプの客観的事物(例えばしるしと事態)の間の連結として理解するというよりは、many of the figures in early Romanticism and the prelude to it ロマン派初期およびその前奏となる人々の多くは、——特にヘルダーは——sought to understand meaning as the expression of some kind of order, not as a link between two types of "things." 二種のもの間の連結としてではなくて、一種の秩序の表出として意味を理解しようと追求した。In expression, we clarify something about ourselves that otherwise remains indeterminate (such as a feeling), 表出において、われわれはわれわれ自身の何かを明確化する。そうしないなら、その自己は(たとえば感情として)不確定なままにとどまる。and we realize some aspiration (thus making the aspiration more determinate). われわれは抱負を実現する。(こうして抱負はますます確定的になる。) Expressivism revived a key element of the Aristotelian tradition, 表出主義は、アリストテレスの伝統の鍵となる要素を復活させた。namely, Aristotle's "hylomorphism," アリストテレスの質料形相論である。the union of form and matter. 形と物の結合である。However, expressivism differed from that tradition in holding that the form <that is realized in matter (or embodiment)> is not something <that is determinate prior to its embodiment> しかし、表出主義は、形相は、質料のなかで実現される(あるいは具象化される)がそれが具象化される前から確定していると信じる伝統からは異なっている。and then is only actualized; 形相は現実になるのみである。rather, it acquires its determinateness in its being expressed.むしろ形相は表出されることによってその確定性を獲得する。」(p.142)

岩波の哲学・思想事典では「表現主義」(Expressionismus)という美術史の概念を項目として立てているが、Expressivismは欠落している。弘文堂の現代倫理学事典には「広義での表出主義 expressionism」という語がある(636頁)が、研究社の「イギリス哲学・思想事典」は「表出主義 expressivism によればあたかも実在的な道徳的性質を記述しているかのように語るとき、われわれは自己の情動や態度などを世界に投影している」(207頁)と記述している。

「表出主義」 expressivism (ブラックバーン三版)

Theories that take as fundamental not the thought that we always use words to describe the world, but often to express attitudes, stances, habits of inference, and so

on. われわれが世界を記述するためにつねに言葉を持ちいるという思想を根底的と見なすのではなく、われわれがしばしば態度、立場、推論の習慣などを表現するために言葉を持ちるという思想を根源的だとみなす理論。Particularly in ethics, 特に倫理学では the term applies to any theory that locates the primary function of ethical sentences 倫理的な文章の原初的な機能を in the expression of attitudes, emotions, or other practical states, 態度、情念、他の実践的な状態の表現に、or in the issuing of commands, or the putting of pressure on action もしくは、命令の周知、行為への圧力に位置付けるような理論には、どれにでも表出主義が当てはまる。The older term covering much of the ground was 'emotivism', この立場の多くをカバーする古い術語は、情緒主義'emotivism'であった。

but this doctrine became linked with naïve views about the state of mind expressed, しかしこの情緒主義という教義は、心の状態に関する素朴な見方と、and naïve views about the consequences of the theory for notions such as truth and objectivity. 真理とか客観性とかの想念のための理論の帰結に関する素朴な見方と結びついているようになった。Expressivism is also applied to views in other domains that stress the practical function of uses of language rather than any function of representing facts. 表出主義は、したがって、他の領域でも、表象している事実の機能よりも、言語使用の実際的な機能の方に重点を置く立場には、適用できる。

So there are expressive theories of causation, modality, knowledge, and truth. *Pragmatism can itself be seen as a generalised expressivism. 因果、様相、知識、真理の理論に表出論が存在する。プラグマティズムは、一般化された表出主義と見なしうる。」

5、再びヒュームからカントへ

ブランドムの文章には、野心に満ちた、はつたりの響きが感じられる。「もしかしたら、この人は空手形を出すだけで、現金は持っていないのではないか」という不安を感じさせる。

Robert B. Brandom: *Articulating Reasons — An Introduction to Inferentialism*, Harvard University Press 2001

約200頁の講義録で、最初の40頁ほどの Introduction で、哲学史的な文脈の中での彼の営為の位置づけを語っている。

「Sellars once said that the aim of his work as a whole was to begin moving analytic philosophy from its Humean phase into a Kantian one. セラーズは、全体としての彼の仕事の目的は、分析哲学をそのヒューム的な局面からカント的な局面へと動かし始めることだと語ったことがある。The full implications of this remark include reverberations contributed by many of the chambers and corridors of the Kantian edifice. この発言のすべての含意は、カントという大聖堂の多くの小部屋とか柱廊とかから重なり合っ

て生まれる反響を含んでいる。But at its heart, その核心においては I think, is the conviction that the distinctive nature, contribution, and significance of the conceptual articulation of thought and action have been systematically slighted by empiricism in all its forms. 思想と行為の概念的な分節化の、明確な本性、その役割、重要さが、そのあらゆる形式において経験主義によって系統的に軽視されてきたという確信であると思う。Although the addition of logic to the mix in the twentieth century was a promising development, there was from Sellars's point of view a failure to rethink from the beginning the constraints and criteria of adequacy of the enterprise in the light of the expressive power the new formal idioms put at our disposal. 20世紀のごたまぜに論理学を添加することは、期待できる展開ではあったが、セラーズの観点からすると、その新しい慣用語がわれわれの処置に加えた表現力の光に照らしてみると、最初からその企画の諸制限と適切さの基準を再考する誤りがあった。The result was the pursuit of traditional empiricist visions by other means 結果は、伝統的な経験主義のヴィジョンを他の手段で追求することに終わった。—ones that could not in principle do justice in the end to the normativity of concept use その手段は、原理的に概念使用の規範性に対して正しい対処が結局はできなかった。that finds its expression variously in the distinction between laws of nature codifying inferential relations among facts, on the one hand, 概念使用の規範性は、ひとつには、多様な形で、事実と事実の間の推論的な関係をコード化する自然法則の間の差異にその表出が見られる。and mere regularities regarding them, on the other, and in the difference between acting for a reason and merely moving when prompted.他方では、それらに関与する単なる規則性に見られる。そして、理性を求める行為と単なる惹き起こされた運動との差異に見られる。」(p.32)

まず哲学史の復習をしてみよう。日本で普及している西洋哲学史は、ヘーゲル主義の哲学史の英国バージョンをフェノロサが東大で講義したことから始まった。ヒュームによって独断の眠りを醒まされたカントは、しかし、ヒュームの誤りを指摘した。ヒュームは、因果律と言う「アプリオリの総合判断」を「アポステリオリの経験判断」だと早とちりした。「アプリオリの総合判断はいかにして可能的か」。これがカントの切り開いた道で、フィヒテが先頭を切り、シェリングが進み、ヘーゲルで絶頂となった。これがヨーロッパでの古典的な定番である。「アプリオリの総合判断」の可能性を認めるという点では、ヘーゲルもカント主義者である。

英米の分析哲学が、「アプリオリの総合判断」の可能性がないと知った。可能なアプリオリは「アプリオリの分析判断」のみ。これがラッセルの出発点である。当然、カントによるヒュームの克服はただの夢だった。カントへの道を引き返して、ヒュームから再スターを切らなくてはならない。これが「論理的原子論」、「論理実証主義」、「分析哲学」のたどった道であった。

それが今、「ヒュームを超えてカントへ」という掛け声に変わった。たとえば現代の「実在主義論争」は、シェリング・ヘーゲルが「同一哲学」を唱えたときの問題意識と構造上は同一である。1990年代の「実在主義論争」は、1800年代の「同一哲学」の再現である。ヘーゲル復権の掛け声は、「同一哲学」の解決をヘーゲルが「果たした」と見なされる軌跡が、「実在主義論争」の帰結となるという見通しの上に成り立っている。

「実在主義論争」に関しては、弘文堂「現代倫理学事典」の「実在論」の項目(戸田山和久)は的確に記述されている。「プシロス科学哲学小事典」(Stathis Psillos: *Philosophy of Science A-Z* 2007)には、「実在論、反実在論」(Realism and anti-realism)という項目があるので、参考にしたい。

「実在論、反実在論」 Realism and anti-realism (プシロス科学哲学小事典)

「Historically, realism was a doctrine about the independent and complete existence of universals (properties). 歴史的には、実在論(実念論)は普遍者(実体)の独立かつ完全な実存を説く教義であった。It was opposed to nominalism. それは唯名論と対立した。Currently, realism has a more general meaning. 現代では実在論はもっと幅のひろい意味をもつ。It affirms the objective reality (existence) of a class of entities, and stresses that these entities are mind-independent. 実在論はあるクラスの存在者の客観的実在(実存)を肯定する。Realism is primarily a metaphysical thesis. 実在論は、もともと形而上学的な立場である。But many philosophers think that it has a semantic as well as an epistemic component. しかし、多くの哲学者が実在論には意味論的認識論的な成分があると考えている。The semantic thesis claims that a certain discourse or class of propositions (e.g., about theoretical entities, or numbers, or morals) should be taken at face value (literally), as purporting to refer to real entities. [実在論の]意味論的なテーゼは、(理論的な存在者、数、モラルに関して)ある一定の議論、命題の集合実在的な存在者への言及を伝えるものとして、額面上(文字通りに)、受けととられなくてはならないと主張する。The epistemic thesis suggests that there are reasons to believe that the entities posited exist and that the propositions about them are true. 認識テーゼは、その存在者が実存すると信じる、またそれに関する命題が真であると信じる理由があるということを示唆している。Given this epistemic thesis, realism is opposed to scepticism about a contested class of entities. この認識テーゼの場合、実在論は存在者の当該クラスに関する懐疑主義と対立する。Anti-realism can take several forms. 反実在論にはいくつかの型がある。One of them is anti-factualism: その一つは反事実主義である。it understands the contested propositions (e.g., about unobservable entities, or mental states, or numbers) literally but denies that there are facts that make them true. 反事実主義は当該命題(観察不能存在者 [以下で説明]、心的状態、数)を文字通りに理解するが、それらを真理とす

るような事実が存在することを否定する。Hence, it takes the contested propositions to be false 反事実主義は当該命題を偽であると見なす。and denies that there are entities that these propositions refer to. そして、これらの命題に関与する存在者の存在を否認する。Mathematical fictionalism and ethical error-theory are species of this form of anti-realism. 数学上の仮想主義と倫理的な誤謬論 [以下で説明] はこの型の反実在論である。Another form of anti-realism is non-factualism: 反実在論の別の形は、非実在論である。the 'propositions' of the contested class are not really propositions; 当該クラスの命題は実は命題ではない。they are not apt for truth and falsity; それらには真も偽も相応しくない。they are not in the business of describing facts. それらには事実を記述することが仕事じゃない [と言う]。Instrumentalism 道具主義, ethical noncognitivism 倫理的非認知主義 and mathematical formalism 数学的形式主義 are cases of this kind of anti-realism. というような反実在論の種類がある。A third popular form of anti-realism comes from Dummett who argues that the concept of truth is epistemically constrained. 反実在論の第三の有名な形が、ダメットから出てくる。ダメットは、真理の概念は認識論的に規制されると論ずる。Dummettian anti-realism does not deny that the contested propositions (e.g., about numbers) can be (and in fact are) true, but argues that their truth cannot outrun the possibility of verification. ダメット流の反実在論は、当該命題が (たとえば数について) 真でありうることを否定しない。しかし、しかし、それらの命題の真理は確証の可能性を超えることはできないと主張する。This species of anti-realism equates truth with warranted assertibility. ダメット流儀の反実在論は真理と [デューイの] 確証された確実性とを同等に見なす。Mathematical intuitionism is a case of this form of anti-realism. 数学的な直観主義はこの形の反実在論の一例である。Given this Dummettian perspective, realism is the view that every proposition of the contested class is either true or false, independently of anyone's ability to verify or recognise its truth or falsity. ダメット流の展望で見ると、実在論とは当該クラスのあらゆる命題が真か偽かであるという見方である。真偽を確証し、認識する能力とは無関係に。Hence, realism is taken to subscribe to the logical principle of bivalence. それゆえ、実在論は論理的な二値原則を裏書きするべきものと解される。」

戸田山和久は、形而上学的実在論、意味論的実在論、科学的実在論を挙げているが、中間理論としては、ブラックバーンの「準実在論」(quasi-realism)、ファン・フラーセンの「構成的経験主義」(constructive empiricism) がある。

「観察不能存在者」(unobservable entities) (「プシロス科学哲学小事典」)

「Unobservable Entities, for example, electrons, or DNA molecules, that cannot be seen with the naked eye. たとえば、電子、DNA 分子は肉眼では見えない。They are posited

as constituents of observable objects and/or as causes of their observable behaviour. それらは観察可能な対象の構成成分として定立されている。Many scientific theories seem to assume their existence. 多くの科学理論はそれらの実存を受け入れているように思われる。Scientific realists take it that there are such entities (i.e., that the world has a deep unobservable structure) and that scientific theories describe their behaviour. 科学的実在論者は、そのような存在者（世界は深い観察不可能構造をもっている）が存在すると解し、そして科学理論はこうした観察不可能存在者の行状を記述すると解している。Empiricists (but not all of them) have typically felt that positing unobservable entities is illegitimate, since their existence transcends what can be known directly from observation and experiment. すべてはないにしても経験主義者は、典型的には、観察不可能存在者の定立は邪道だと感じている。それらの実存は、観察と経験から直接に知られるものを超越しているからである。」

「錯誤理論」 error-theory (The Blackwell Dictionary of Western Philosophy, ed. by N. Bunnin and J. Yu, 2004)

「ETHICS J. L. Mackie's term for his position rejecting ethical naturalism. マッキーの倫理学の用語で、倫理的な自然主義を拒否する彼の立場のための用語である。Ethical naturalism claims that all moral judgments refer to some objective moral property, are capable of truth and falsity, and have their truth-value determined by an external objective meaning. 倫理的な自然主義は、あらゆる道徳判断は何らかの客観的な道徳的な実体を指示していると主張する。According to naturalism, moral judgments are true through reflecting what is the case in nature. 自然主義によれば、道徳的判断は自然の中に存在するものを反映することによって真である。Mackie rejects ethical naturalism because he holds that there are no objective values or moral facts to determine the truth-value of moral judgments. マッキーが倫理的な自然主義を拒絶する理由は、道徳判断の真理価値を決定することができるような客観的価値、道徳的事実は存在しないと彼が考えるからである。Hence, all ethical theories that presuppose the existence of objective moral truth are systematically wrong. 客観的道徳的真理の実存を前提するあらゆる倫理的理論は体系的に間違っている。Mackie claimed that morality is a matter of free choice, rather than something imposed on us by an objective moral reality. マッキーは、道徳は自由な選択の問題であり、客観的道徳的価値によってわれわれに課せられるようなものではない。His non-cognitivist position echoes Moore's naturalistic fallacy and Hume's is /ought gap. 彼の非認知主義的な立場は、ムーアの「自然主義的な誤謬」およびヒュームの「is /oughtギャップ」と呼応している。"The denial of objective values will have to be put forward not as the result of an analytic approach, but as an 'error theory', a theory that although most people in making moral judgements implicitly claim, among other things, to be

pointing to something objectively prescriptive, these claims are all false." Mackie, Ethics 客観的な価値の否定は、分析的な手法の結果として推奨されるようなものではないだろう。「錯誤理論」として推奨されるべきである。すなわち、ほとんどの人が道徳判断のを作る際に内在的に主張している、なんらかの客観的指令を指示していると主張するにもかかわらず、この主張はすべて誤りである。」

倫理の実在主義か否かという現代英米哲学の大論争は、ヘーゲル哲学の中では「客観精神」として、ある意味では決着がついている。つまり、ヘーゲル主義では、倫理判断、価値判断の妥当性は、自然認識の際の対応説と同じモデルで解釈すべきではなく、客観精神という別のジャンルとして扱う。言い方を変えると、「社会的に妥当」である判断は、「正しい」と言われるが、それは「白鳥が白い」と同じ橋架け問題の枠組みで「正しい」のではない。現代の英米哲学のヘーゲルへの接近のなかには、倫理の実在論論争が、ヘーゲルの客観精神という場面に移し替えた方が生産的な議論になるという洞察も含まれている。

本稿はここでいったん終わる。予告した「哲学新語集2016」のリストでまだ訳していないものが残っているが、続編で翻訳の仕事を決めたいと思う。ここまでの引用と論述で、私が述べたかったことは、まず第一に、英米の哲学とヘーゲル主義との間に激流のような交渉が生まれているということが、現在、世界の哲学で起っていることの最も重要なできごとであるということである。それは決して表面的な接触ではない。極端に言えば、西洋文化全体の根源的な変化と連動しているに違いない。次に、その交渉の深さを示すものとして英米哲学のなかでの現在の実在論論争が、かつてのシェリング、ヘーゲルの同一哲学に対応し、ブランドムをはじめとするかなり多くの哲学者が、ヘーゲルの晩年の哲学が現在の実在論論争の結着点と重なるという展望をもっているということに注目したい。本稿では触れなかったが、バイサー (Frederick C. Beiser) の「ドイツ観念論」研究が、この同じ展望のもとに展開されていると思う。第三に、実在論論争は、科学哲学と倫理学がともに共通の認識論的構造を持つかどうかという論争を含んでいるが、一部の英米の研究者が注目しているようにヘーゲルの「客観精神」という枠組みがどうして成立するのかを研究することの方が解決の早道であると思う。ここからは、まったく独自の「社会性の存在論」が将来、展開されることになるという期待感を私はもっている。その存在論のなかに「貢献心」という心性が存在することが明らかになると思う。第四に述べたいことは、英米哲学の出版状況である。事典、歴史、提要、リーディングス (準体系的な論文集) のような二次的出版物のヴォリュームには驚かされる。本稿で一部を紹介した「分析哲学史」 (The Oxford Handbook of The History of Analytic Philosophy, ed. by Michael Beaney 2013) は、将来、「分析哲学の終わりの始まりの指標」という位置づけを持つかもしれない。第五に、日本の哲学研究が決定的に今世界で起っている思想的な激動に立ち遅れる可能性がある。若い研究者にこの状況に立ち向かう姿勢をとってもらいたい。そのための踏み

台として、私は本稿を書いた。踏み台に乗ると少し遠くまでが見えることを期待している。
(第1回了)